

環境に委ねる情報

—スウェーデンの福祉施設、教育現場の観察から—
Entrusting the Environment with the Information

- 小松研治 / 富山大学芸術文化学部、小郷直言 / 大阪大学大学院経済学研究科、小松裕子 / 富山大学芸術文化学部
KENJI Komatsu / The Faculty of Art and Design, University of Toyama, NAOKOTO Kogo / Graduate School of Economics, Osaka University, YUKO Komatsu / The Faculty of Art and Design, University of Toyama
- Key Words: Environment, Tools, Sweden, Information, Welfare, CAPELLAGÅRDEN

概要：

本稿では、環境が担っている情報を上手にピックアップすることで、生活を快適にし、やさしく人を誘導し、知識の伝承もやってのける北欧のスウェーデンを調査した。その中で特に博物館、美術工芸学校、病院・福祉施設について詳しく見ていくことにする。調査の見方は、人が活動する現場に焦点を当て、人が行う活動の周辺にある環境が人に与える情報について観察した。それぞれの施設で得た具体的な事例から、環境における情報のあり方、提示方法について考察した。

1. はじめに

本稿では、スウェーデン各地を視察した中で、生活の快適さの追求、やさしく人を誘導するやり方、知識の伝承方法などについて詳しく見ていきたい。キーワードは生活環境とそこに配置された道具である。われわれは、環境と人間、人間と人間の間に配置された道具類は意味と価値を備え、人がその情報をつかみ取るのをじっと待っている、と捉えている。この情報はおせっかいせず、堂々と自信ありげに鎮座している。ひとたび何かの行動を起こそうとして周囲に何らかの手がかりを探し、それをつかみ取った時や事前に用意された誰かの配慮に出会った時、そのお陰で戸惑いなく行動できた心地よさと幸せを感じさせる。

知識の継承というような言い回しは、少々大袈裟で人を萎縮させてしまいかねない。さりげない設え、自然と手が差しのべられる道具の取手、ほしいものが分かりやすくそこにある快適さ、淡く照らされた絵画や欲しいと思う位置と高さに配置された調度品、光の演出を楽しむカーテンや壁の色彩、人の語らいを誘う椅子やテーブル類、こうしたものが生活の重要な脇役であることをスウェーデンの人々はよく知っているようだ。継承すべき知識とは、こうした事柄なのである。

生活環境と道具には情報が一杯詰め込められている。情報は用意されているが送られてはこない。必要とする時に気づいてくれればそれでよい。訴えかける必要もな

い。自信ありげに悠々といつまでも待っている。時には不快に感じさせるときがあるだろう。その時にはみなで検討して、改善を試みる余裕があれば十分である。次第によくできるはずだという信頼こそが、社会にゆとりを与える。快適さに対する関心が自身の心の中でなく環境に向いていれば、周りの人が同じように環境を利用している様子を見ることで、維持すべきこと改善すべきことが自然と見えてくる。快適で有意義な生活は環境に任せようではないか、と言いたげである。

こうした環境の中で子供たちが育ち、成長していくことで継承されるものが選択され、次世代に受け継がれていく。潜在化する情報を豊かにすることが、現在を生きていく人間に課せられた重要な責務であることに多くの人が同意している社会、それがスウェーデンという国の特徴のように思われる。

2. 環境が担っている情報

これから描こうとすることは、われわれが対象の周囲を歩き回ること、模型を手にとって回転させて見ることで、どれほど大切な行為であるのかを示すことになる。美術館、博物館、美術工芸学校、デザイン大学、病院、福祉施設、木工工房、芸術家村など、調査のためにスウェーデン各地を視察して回った。そこで様々な人々にインタビューを行い、資料の収集も行ったが、主たる狙いは、施設・環境に施された「配慮」への関心であった。もっとも配慮などという曖昧な表現では、これから伝えようとする意図を台無しにしてしまうだろう。出来る限り具体的に紹介していきたい。しかし、その前に調査にあたって、事物や出来事をどのように見てきたのかについて、あるいは見るべきであったのかについて説明しておくべきであろう。

観察したことを報告するということは、見たものから何らかの情報を得た結果を報告している場合がほとんどであろう。今回のように言葉にしてみたり、写真を選んで解説を加えたりすることによって説明をわかりやすくするという報告のやり方は一般的であるがすべてという

わけではない。話し言葉によって伝えたり、撮影したビデオを編集して映写するというような方法もあり得る。しかし、本質的なところは、「見たものから何らかの情報を得る」という部分に存する。

眼から入ってくるものを、観察者は「頭の中で」さまざまに解釈するので各人の受け取り方は人によって様々である。頭の中では、その人がこれまで経験してきたこと、得た知識、記憶が解釈に大きな影響を与えることになろう。さらにはその人の持っている想像力や潜在的な願望なども本人が意識しないうちに影響することになるかもしれない、と誰しも思っているのではないだろうか。表現力も大いに関係するであろう。旅行記や歴史的事実の記述や内容が、その作者によって大きく異なるのは、ある意味当然であって何ら不思議なことではない。

しかし、ここで観察と言っていることはそうしたことを意味しているのではない。スウェーデンという地で人工的に設えられ、人々が利用できるようにした施設を、「そこにある情報」を探索するという視点から観察した記録である。解釈された情報ではないことに注意していただきたい。

さて、これは先の説明とどのように違うのであろうか。見たものを解釈することに興味はないということである。ここでいう情報とは、施設の利用者に有用な価値や意味を与えるものであるという考え方に立っている。情報を解釈して各自独自の意味や価値が作られるという見方はとらない。たとえわれわれの説明がわれわれの解釈の言明である（これはある意味避けられない）としても、その伝えたい内容は、利用者がその施設の意味や価値を（無意識であることも含め）知り、それを自らの行為のための情報として活用している実態を活字で伝えたいというところにある。『私たちが、生きているこの世界には、…、どのような記述の方法をとっても書き尽くすことのできないであろう膨大な意味が満ちている。私たちはこの周囲に意味の充満する世界で生まれ、成長し、子供を育て、働き、老いて、死ぬ。…私たちの生は、私の皮膚の内側だけでなく、それが置かれている周囲とともにある』¹⁾のである。

われわれが解釈に興味がないというのは、人々の機知や性格を知りたいと思い、そのあり場所をその人々の内部（たとえば記憶や観念）に探し求めても無駄であるからである。私たちが知りたいと思っている、彼の人の能力、関心、嗜好、方法、確信などは、その大部分が外部に現れたその人の振る舞いを環境とともに観察することによって見出されるのである。ある環境の中で彼が行った行為こそがたくさんの情報を直接われわれに与えてくれるのである。もちろんわれわれの関心や注意の置き所、観察能力のせいで情報を見落とす場合もあるだろうが、

たとえそうであったとしても誰もが観察できる情報はそこに実在していたといえる。

ここで一つのエピソードを紹介しよう。それはストックホルム市内の「シティホテル」の一階の出入口付近で見かけた光景である。入り口には大きなガラス張りの回転ドアが中心よりすこし左寄りに配置され、そのすぐ横の右側に二つ目のごく普通の横にスライドする自動ドアが用意されていた。このドアも含めて玄関はすべてガラス張りで、外からの明かりをロビーに取り入れている。両方のドアの入り口には足ふきマット（幅1メートル、長さ3メートルほど）がドアの外と中に繋がるように敷かれており、客の靴に付着した雪や泥などを少しそこで落とさせてからロビーに出入りするようにはしてあった。私は到着した当初、回転ドアの方ではなく、小さい方のドアを利用した。

次の日の朝、そのロビーで時間待ちをしていたとき、ある小さな出来事を目撃した。理由はよくわからないが、昨日利用できたスライド式自動ドアが、今朝は利用できない旨の小さな張り紙がしてあった。一人の来客者がホテルに到着し、回転ドアではなくスライド式自動ドアの方に向かったが、案の定ドアは開いてくれない。張り紙に気づいたが明らかに不機嫌な様子で渋々回転ドアを通してフロントに向かった。フロントで一言二言なぜドアを使えないようにしてあるのかを不満げにフロントマンに問いただしているように見えた（実際にはこのやりとりは遠くからで聞こえず、このあとに起った出来事からの推測である）。



図1 マットが撤去されたあとのホテルの出入口

しばらくしてボーイらしき若者が玄関口にやってきて、スライド式自動ドアの外と内に敷いてあったマットを端から手際よくまるめ、そのまま抱えてドアから遠くの方に片づけて何ごともなかったように元の業務に戻っていった。張り紙はそのままであった。(図1)その後、来客者のほとんどはマットのある回転ドアを唯一の入り口として利用するようになった。ボーイの行為の意味をご理解いただけたでしょうか。マットは入り口への誘導路の役割をしていることを事も無げに察知し、それへの適切な対処(対応)を行ったといえる。運悪く(あるいは習慣で)スライド式自動ドアに向かいかけた人も、遠くから白い張り紙に気づくなり、進む方向を回転ドアへ向け直している。たぶん紙に書かれた文字は遠くからでは読めないはずなのに。

この一連の光景を見て、彼の国ではこのような問題にどのように対処するのであろうかと想像をかき立てられた次第である。捨て置くには忍びなく、厚かましくもその若者に「なぜ、マットを片付けたのか?」と質問してみた。ボーイからは事も無げに「マットがあると故障しているドアの方に誘導してしまうから片付けた」という単刀直入の答えが帰ってきた。彼はフロント係からマットの撤去指示があったわけではないのだと言う。これくらいのことは誰でもすることであり、まして仕事なのだから当然だと思われるかもしれない。人の行動をある方向や範囲に誘導するために、文字ではなく物に情報を持たせて用意することや、反対に行動を制限させるために物の持っている情報を撤去するということが、日本の同僚の姿を思い起こしてみても、誰にでもできることとはとても思えなかったのである。若者が事も無げにとったこの行為は、物事に対する理解の深さを思い知らされる出来事であった。

取り立てて大袈裟に論評するような出来事でもなさそうに見えるが、われわれはここに「人々が利用する情報への配慮」の典型を見ることが出来ると考えている。この出来事は「人の行為は何によって制御されているか」という問いに対するストレートな解答であるとわれわれは考えている。何か頭の中で先にプランを立て、それによって身体が動くはずもなく、人が何かに誘導されて動かされたのは、その環境にそれなりの情報があり、それを察知したはずである。このことを知らなければ、先のボーイの行いは理解できないはずである。確かに、人間であれば張り紙に書かれてある内容を読めば(使用禁止の文字や記号でも同じ)、それを理解して別の入り口に向かうだろう、「それでいいではないか」、としてみえればボーイのような対応はけっして取らないはずである。客の行為は、周囲にある対象(ここではマット)を特定した情報に導かれた結果である。そのためには身体の動

きによってはじめて見えてくる外環境の情報をともかく特定しなければならないであろう。

人の動きを見て、そこに何かを「特定」したボーイと同じように、われわれの周囲にあって人間の行為に意味を与えている環境を発見することが、第4章から第6章までの主要な目的である。しかし、その前に情報と知識に対するわれわれの考え方を述べておく。

3. 情報と知識

外在主義的な知識観を標榜するわれわれとして、ここで情報と知識について若干の説明をしておく必要がある。現在でも知識と情報に内在主義的な定義を与えることが一般的である。情報は外部より伝えられ、感覚器官を通して脳に送られ、その過程で様々な加工が施される。通常は内容の豊富化がなされる。知識のように構造化されたり、信念のようにまだ単なる思い込みであったりするが、加工の過程では記憶内容や推論が大きな役割を果たすことになる。

これに対して、われわれは外在主義的な定義を用いようと思っているのであるが、その理由は、内在主義的な知識と情報観には大きな欠陥があるからである。それは、内在主義的な見方が、見ることへの疑義から始まり、人間はそうした外界から得られる信頼できない情報を内的な思索の助けを借りて、より信頼できる正確な知識へと作り上げてきたことが強調されているからである。^{*1}

西洋の伝統でもあるこの知に対するとらえ方は、二十世紀に入り批判にさらされることになった。批判は心身二元論への新たな疑義に始まり、心(マインド)に対する科学的な問いかけによってもたらされた。

本論が依拠する批判の急先鋒は、J.J. ギブソンの生態学的心理学である。²⁾ ギブソンの紹介者でもあったリード(E.S. Reed)によれば、ギブソンは、『「不確定さを取り除き、減らすもの」というよくある情報の定義に対しては、これは「主観的な定義だ。私は受信者とは独立に情報が伝えるものを定義したい。」³⁾』というギブソンのメモを記している。われわれは、ギブソンの考え方と同様に、伝達される情報ではなく、「そこ(環境)にある情報」(このあいまいな言い方は徐々に改めていく)に焦点を当てるであろう。ここでギブソンの定義を借用することにしよう。『情報という資源の特殊性は、それが他の資源を特定するしかたにある。情報は、特定される当の資源になることなく、その資源を特定しなければならない。』⁴⁾。^{*2}

一方、知識については、ドレッキの外在主義的知識観を援用する。⁵⁾ 戸田山は『ドレッキの知識論の眼目は、知識の獲得・伝達をこの世界での情報の流れの中に一齣として位置づけることにある。彼は、情報の流れを扱う

に当たって、情報の発信者、解読者という特定の主体を前提せず、世界で生起する様々な出来事を直接情報の担い手にと考え、その継起を情報の流れとして捉える。知識は、こうした情報の流れの中に埋め込まれた情報の存在形式の一つに他ならない。要するに、知識とはこの世界に生起する自然現象である』⁶⁾と主張する。

知識について戸田山は、『どのような形で保持され使用されている情報が知識なのか』という問いが、「どのような条件を満たす信念が知識なのか」という伝統的な問いに代わる新しい問題になる』⁷⁾、と述べている。^{*3}

つまり、スウェーデンで観察した出来事や環境を情報が詰まった知識としてとらえてみようということである。このような方針で戸田山の言う「新しい問題」に挑戦してみようとするのが、本論の一つの課題のである。そして、情報が「どのような形で保持されている」のかを実地に観察し、また「使用されている」のかをこの目で確かめること、これが本論の主題である。以下の章では、情報と知識に対するこうした捉え方を出来る限り具体的に説明していくことにする。

4. リアリティを追求する (アーミー博物館)

ストックホルム市内のアーミー博物館は、古代から現在までの戦争、戦場、武器などを時代を遡りながら見学できるかなり大きな歴史博物館である。(図2) 展示物の特徴は何よりもそのリアルさである。戦場の生々しさ、戦時における生活の様子、兵士の死に様、兵舎での生活環境、塹壕での疲れ切った兵士の苦悩、人間の残虐性などどれ一つをとっても手抜きはなく、髪の毛の乱れや軍服の汚れ、顔の表情に至るまで、徹底して見る者を圧倒する臨場感を持たせてある。張りぼてや中途半端に似ているだけの模型でごまかしたくないという展示者の気迫が観覧者に迫ってくる。(図3, 4)

なぜにこれほどまでに展示物にリアリティを求めるのか。数十もある人間の頭蓋骨の模型はどれ一つとして



図2 スtockホルムにあるアーミー博物館



図3 雪の中で焚き火をする兵士と凍死した兵士の等身大人形



図4 拷問を加える兵士と捕虜の様子を再現したリアルな人形

同じものがない。これだけの数量を並べるなら型抜きで大量生産してもよさそうに思えるのに。また、兵舎につながれた馬の模型では、馬の後ろに立つとその馬が後ろ足を蹴り上げる機械仕掛けも、馬らしい行動を忠実に再現したものであり派手な演出を誇示するためでは決してない。案の定そこを通りかかった親子連れの小さな子供は、そのことにびっくりしてひとしきり恐怖の悲鳴を上げ続けていた。観覧者は親子連れが圧倒的に多く、教育の一環としての機能をこの博物館がもっていることは明らかであった。小さな観覧者に博物館の展示者がまるで真剣勝負を挑んでいるかのようなのである。大人も真剣にならざるを得ず、なぜこれほどまでリアルさにこだわるのか、その理由を探ってみたくなる。

当たり前のように見えるが、博物館では観覧者はさまざまな展示物を動き回りながらキョロキョロと見て回る。パネルに書かれた歴史的事実による文字的な説明、同じく壁に展示された写真類も随所に設置されているが、圧倒的に多い展示物は実物大の状況設定である。そこに必要な人物、モノ、動物、資材、そしてできるだけ広範囲をカバーする状況設定のための環境(木片、建物、枯葉、ゴミ、残骸、たき火、泥、水、雪、血痕、ウジ虫

など)が設えてある。経路を歩く足元は出来る限り薄暗くしてある。視線が展示物をなめ回すことに集中できるように、余計な夾雑物には目がいかないように細心の注意が施されている。博物館で一番邪魔なモノは歩く地面と天井であることを知り尽くした照明の当て方が実に上手である。動き回る眼と頭が展示物の面をさっと舐め回すと、観察者が一瞬その場所に迷い込んだかのような臨場感を醸し出す。どの方角からの視線にも対応した自信にあふれた精巧な模型は、われわれをあたかも誘導して遊んでいるかのようなようである。こうした行動ははじめから想定されているようで、それほど「見て回りたく」させられる。兵士が寝そべった地面の襷は、色、肌理、肌触りまで手抜きがない。表面的な形を見せようとしているのではない、そこにある情報を引き出してほしいと訴えてくる。光学的情報がどれほどたくさんの情報を、動く観察者に抽出可能にさせられるのかについてスタッフが知っていなければ、展示物に万難を排して取り組む気にはならないだろう。

『何かを特定する情報は、特定されることに似ている必要はない。…大事なことは、持続する環境を特定する情報を視覚システムがピックアップできるかどうかである。』⁸⁾ 日本の観光地によくある歴史的な見せ物小屋では、リアルさを勘違いして似せることに力が注がれ、刺激を強くして反応を強要してしまっている。そのため肝心の情報のピックアップがなんともお粗末になっているというところを多く見かける。それに比べると、このアーミー博物館では、恐ろしいことは恐ろしく、醜いものは醜く戦争のありのままを再現し、生身の人間の仕業として表現されている。子供は(もちろん大人でも)生き生きとした場面を見て回り、事物を探索し、出来事、事物がどういうものであったのかを知らず知らずのうちに学習できるようになっている。

たくさんの展示物の中の一つだけ詳しく紹介しておこう。時代ごとに進化してきたおびただしい数の銃の展示コーナーの一角に、銃の威力が時代によってどのように発展してきたかをわかりやすく説明した展示があった。戦場で使われる銃は当然人間を目掛けて発射されるのであるが、各時代の銃の弾丸が対象物を貫通する威力が模型によってリアルに示されている。このようにアーミー博物館の展示品の特色は、その展示品に持たせている現実味であった。この展示についてさらに詳しく見てみよう。

図5は、19世紀に使われていた単発式ライフル銃から、今日使われているアメリカ製M14型ライフル銃までの進化を4段階に説明するための展示風景である。ライフル銃の展示と弾痕の展示とは実際の飛距離が確保されていて、棚の上に用意された各ライフル銃を実際に手にして射的をめがけて構えることができ、実物の重量や射的

までの距離を実感することができた。一方、射的側には、弾丸が射的に対してどのような破壊力があるのかを示す弾痕の痕跡見本がガラスケースの中に展示されていた。弾痕を示す見本は、厚さ8ミリの鉄板が2枚対になったもの、蝋の塊、松材のブロックの3種類にそれぞれのライフル銃から発射された銃弾の弾痕が展示されていて、ライフル銃の性能の進化に対応して異なる衝撃の大きさを物語っていた。鉄板以外の素材は半分に分られ、食い込んでいく弾丸の弾痕をリアルに見せている。(図6)19世紀に使われていた単発式ライフルの弾痕は、鉄板に開いた穴の周囲にも大きなゆがみが生じる様子が良く分かる。発射された銃弾の発射速度が遅く、銃弾が銃身



図5 ライフル銃の進化と弾丸の貫通力を示す模型



図6 3種類の素材に対する弾丸の貫通痕跡を示す模型

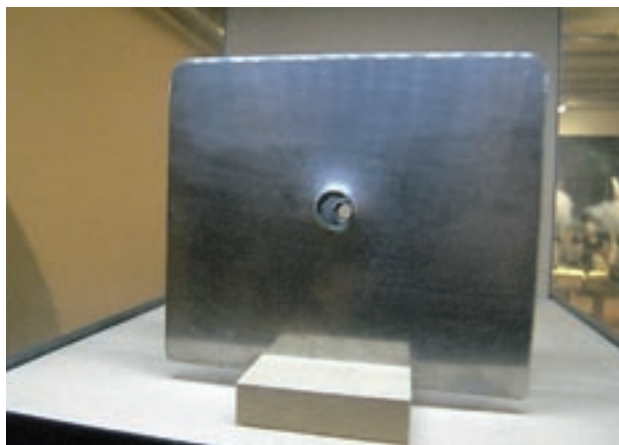


図7 弾丸の貫通痕跡を示す2枚対になった鉄板の様子

の中のライフルライン（銃弾に回転を加えるために掘られた螺旋状の溝で旋条痕として銃弾に痕跡を残すこと）によって加えられた回転力も少ないことが理解できる。また同じライフルで無垢の松材に命中した弾丸は、10cmほど入ったところで弾丸がつぶれて止まっている。M14型ライフルでは、鉄板に弾丸の穴だけが残り、穴の周囲への影響は少ないばかりか2枚の鉄板を見事に貫通していた。（図7）松材と蝋の魂には、弾丸の入り口は小さく、弾丸の出口に従って貫通痕跡の径が大きくなっていることから、このライフル銃から発射された銃弾は発射速度と回転が速く、恐ろしい破壊力を持っていることが理解できた。このガラスケースには、3段の棚板にそれぞれの素材が置かれ、それらを鮮明に見せるために各棚の下に照明が取り付けられていた。

一方、弾痕見本の置かれた側からライフル銃の置かれた方を見ると、その壁面には当時の騎兵隊がこちらに向かってライフル銃を構え、火薬の煙とともに発射している等身大写真が貼られていた。（図8）さらに、この展示コーナーには「構え！撃て！」の号令を下す隊長の声と共に「ドドーン」という銃声が効果音として流れ、ライフル銃が使われている現場の緊迫した臨場感を演出し



図8 発砲する騎兵隊の等身大写真

ていた。ライフル銃の重さを感じ、距離を実感し、音を聞き、痕跡を見て知ることによって、ライフル銃という道具の進化を知るだけでなく、銃を撃ち合うことの怖さを疑似体験させる。

5. 人工物環境に委ねよう（介護・医療施設）

今回、イェーテボリ市の隣市、アーリンソースの地域病院と、カルマル市近郊にある老人ホームとグループホームの2つの高齢者施設を訪問し、そこで実際に働いているお二人に案内していただいた。語り尽くされた福祉先進国のイメージはもはやそれほどではなく、システム的には日本とあまり変わらないというが、国の施策や医療・福祉のマクロな側面の比較は専門家に任せて、われわれは、もっと高齢者や患者、医師・スタッフが生活し、働いている現場（環境）に焦点を当てることにした。

どの国でも病院内での臨終、救急搬送された患者の深刻な容態など、医師は患者の家族や縁者にそのことを伝えなければならない場面が訪れる。まず、驚いたことは、その告知のための部屋が特別に用意されていたことである。家族や縁者の悲しみや苦悩を、医師の言葉によって和らげることはとてもできる相談ではない。深い悲しみに遭遇したとき、人は周りの存在が希薄になったかのような感覚、五感にシャッターが下ろされていくような印象を味わう。だからといって、深刻な出来事の通知が、他者が行き交う廊下のベンチであったり、医師のデスク脇の回転椅子越しに、騒々しい病室の一角でなされることは許し難い行為であろう。悲しみを事実として受け入れられるための場所と猶予とが必要なのである。病院側ができる精一杯の環境への配慮がこうした部屋の用意ではないだろうか。部屋の印象は彩度を抑えた静寂なものである。カーテンの模様は控えめな木の葉模様で、温かみのある深緑の木製椅子とテーブルが置かれ、医師からの専門的見解を伝える厳しさも伝わってくる。（図9）

廊下から開け放たれた病室内をみると、病室ごとに壁



図9 静寂な印象を与える告知専用の部屋

の色が変えてあり、ちょうど正面の壁には異なった絵画が飾られ、医者や看護者はドアを押してその部屋に入る時、必ず壁の色や絵画が視野に飛び込んでくるはずである。壁の色や絵画の情報によって、似た造りの病室に惑わされることなく、自分がいまから誰の看護をすることになるのかを瞬時に蘇らせる。

出入り口部分や廊下の曲がり角の床は色と素材を変えてある。視覚障害者のための誘導用ブロックは車椅子には優しくないが、素材を変える工夫で解決されている。大きな開閉ドアの前では、開く向きと範囲を示した扇型の軌跡が黄色いラインで描かれ、階段降り口には進入禁止看板とポールが危険を事前に確実に知らせる。廊下で起こりうる事故に対しても注意がいき届くように、通路の曲がり角には凸ミラーが設置されていて、出会いがしらに人とぶつかることを避けるために視界が拡張されている。

介護・医療施設はどうしても閉鎖された環境とならざるを得ない。そのため窓からの光、部屋の照明、色遣いへの配慮が徹底している。使われているカーテンは微風に揺らぐほどの薄い生地に暖色を用いた植物模様がプリ

ントされたものが多く、外からの光がほんのりと透けて模様を鮮やかに見せている。部屋ごとに異なった模様のカーテンが設えてあり、家具の色相との調和を考えた選択である。生地の薄さが軽快な雰囲気を作り、モダンな模様がアットホームな雰囲気を作りだしている。廊下の照明は角を曲がるたびに異なった同デザインで統一され、木製のシェードから作り出される反射光が穏やかに周囲を照らす。(図10,11)

廊下は単なる移動の導線ではない。美術館での絵画・彫刻鑑賞を彷彿とさせるさりげない鑑賞の経路として利用されている。数え切れないほどの油絵、水彩画、版画、染色画、織物画、鉛筆画、木製レリーフなどがきちんと木製額に入れられている。中には患者さんの制作したのも飾られていて、廊下の幅に対して適度な大きさである。これらの作品の特徴は、恐ろしい脅威を感じるもの、奇抜で激しい表現方法を伴うものではなく、どれも優しい物語性に満ちた作品が選ばれている。(図12-1, 2, 3)「なぜ院内にこれほどたくさんの絵画が飾られているのか？」という質問に、「スウェーデンの病院、福祉施設では、美的環境水準に関する公的な評価基準が設



図10 ベージュの壁の色と紺色の椅子に対応させて、同系色のカーテン模様でコーディネートした部屋の様子



図12-1 壁面に飾られた写真



図11 同じデザインの木製照明で統一された廊下の様子



図12-2 薄肉の陶器レリーフで作られた作品

けられていて、数年ごとにこの審査を受けることが義務づけられている。そのため、多様な美術団体と連携して努力を重ねている。」とのことであった。

一時の休憩、語り、ガラス窓越しの風景を眺めるために用意された椅子やベンチ、そしてテーブルとライティングスタンドが、計算されたかのように間隔をおいて配置され、それぞれのコーナーを異なった雰囲気とコーディネートしている。(図13-1, 2, 3) アーム付きの椅子・ベンチの布張り生地はどれもカーテン模様とよく調和がとれていて、ふんだんに添えられている観葉植物も落ち着いた雰囲気を作り出すために効果的である。中には、ドアのフレームに猫と逃げるネズミの黒いシルエット板が対になって張られていてユーモラスである。(図14)「なぜこれを張ったのか?」という問いに、「高齢者には猫好きが多いからだ」という答えであった。

グループホームの施設環境は、同じ症状や性別を考慮した複数のセクションの集まりからなっている。同じ認知症でも、脳梗塞によるもの、老人性のものなど原因はさまざま、それぞれ介護の仕方が異なる。セクション

に分けることが、入居者個人の尊厳を保つばかりでなく、きめ細かいニーズに対応可能となり、スタッフの専門性と担当範囲を明確にしている。各セクションには個室(住居)とは別に共同のキッチンとリビングが用意してあり、それぞれ異なった家具類によって雰囲気が変えられている。また、セクションごとに個室ドアが青や赤、オレンジ、緑などで色分けされていて、一見同じようにみえる施設



図13-2 楕円テーブルとそれを取り囲む椅子が曲線要素で統一された談話コーナー



図12-3 織りの技術を使った絵画表現の作品と専用の照明



図13-3 椅子の花模様と観葉植物の調和が美しい談話コーナー



図13-1 直線と四角い要素で統一された家具とそれを際立たせる控え目なカーテンで構成された談話コーナー



図14 個室のドアフレームに取り付けられた猫のシルエット板



図15 物を置かせないために天板を斜めにデザインした洋服棚



図16 入居者が持ち込んだ愛着のある道具類

内で迷うことを未然に防ぐ効果を持たせてある。この色分けは、壁に掛けられた案内地図と対応していて、面会者に対する誘導情報としても機能している。

各自の部屋には、入居者が入居前から長年使っていた個人の収納家具が置かれ（置ける空間があらかじめ確保されている）、その上には家族の写真が飾ってあるし、壁にはお気に入りの絵画やタペストリーが掛けられている。「なぜ個人の収納家具まで持ち込ませるのか？」という質問に対して、「高齢者の記憶は、何がどこにあるかということ収納家具の引き出しや棚の位置と一体で覚えている。高齢者と使い慣れた家具を引き離すことは自殺行為だ」という答えであった。もちろん、各入居者の部屋には洋服入れの棚、掃除用具入れの棚などはすでに設置されている。図15は、洋服入れの棚であるが、棚の天板が斜めになった構造になっていた。「なぜ斜めになっているのか？」という質問に、「入居者やスタッフは棚の上についつい色々なものを置いてしまう。それを取ろうとして怪我をしたりものが落ちてきたりするので置くこと自体をさせないために斜めになっている。」とのことであった。

共同キッチンでは、各テーブルに敷かれた色鮮やかなクロスの上に生きた季節の花が飾られ、かすかな香りが周囲に漂う。共有スペースには古い足ふみシンや銅製のヤカン、そして使い込まれた古い家具がインテリアを兼ねて使われている。（図16）自分が住むコミュニティの高齢者施設に入るのは、入所ではなく入居であり、自宅からの引っ越しである。

見てきたように、生活の導線、視線の先、手や足に触れるもの、語らいの距離、照明や音などに気を配り、一つひとつの装飾品や生活雑貨にも繊細な配慮をして気持ちを和らげ、そして必ずといっていいほど美しく座り心地のよい椅子類が配置されている。このことの先に患者への治療行為、高齢者へのケアがスタッフにとっても不快感が少なく、安全で処置しやすくなるようにさらに追

求される。自動で昇降する洗面台が標準として設置されているように、無理を強いたり、余計な頑張りや微塵もみられない。われわれにとっては、変わりなく自然に、今までの生活をそのまま延長できることへの執拗なこだわりが不自然に感じられるほどである。入居者自身が持ち込んだ家具の傷跡は、家族で受け継がれてきた家具の歴史と長年に渡って使いこまれた証であり、本人の活動と切り離すことのできない一部として持ち込まれる。

不満が日々鬱積してくることは、すべての社会組織に共通である。要はその不満をどのレベルで受け止め皆で話し合い、システムを改善していけるかにある。患者・高齢者とスタッフ、スタッフ同士の会談、打ち合わせ、相談のための部屋・場所が必ずといっていいほど適切な場所・位置にあり、打ち解けたり、和やかになったり、落ち着いたりできるために念入りに雰囲気作りがなされている。どのような環境であっても、心の、そして気持ちの持ちようが重要であるといった精神論でなく、快適性や安全性を導くためには周囲の環境の中にその役割を担わせ、より良いものへと工夫を重ねる意欲がなければこのような環境はあり得ないように思われる。こうした飽くなき試行錯誤の積み重ねが、自宅での快適性に劣ることのない自然な環境を作り上げている事実を目の当たりにして羨ましい気分させられた。

6. 技能の伝承方法（カペラゴードン美術工芸学校）

カペラゴードン美術工芸学校では、1954年の設立以来手狭になった陶芸専攻の工房を2006年に新設した。この一大事業に際して、トーレイフとエレンの両教師は5年の歳月をかけてその設計に関わり、学生制作活動を中心に置いて様々な工夫を凝らすことに努力を注いできた。今回の調査では、この両教員から建物の隅々まで注意を払ったその一つ一つについて詳細な理由を聞き取ることができた。その特徴は、空調設備や作業内容に応じた教室の間取りといったいわゆる機能に関することだ



図17 ろくろ機の高さで作られた窓と、作業者の周辺環境の様子

けではない。教員と学生との関係を「指導する側」と「学ぶ側」のふた手に分けて、指導する側が学生を教育管理しやすくするために設計されているものではないという点である。学生の発想や技術向上、学生同士の交流といった活動を支援するための仕掛けが、環境の中に注意深く設計され配置されている。

われわれは、具体的なものを指さして「それはなぜなのか？」と質問し、その意味について解説を受けることができた。大した意味はないだろうと思われることに対しても、そのように設計した意味について明確な答えを持っていて、徹頭徹尾、学習者に対する環境づくりに掛けた思いの深さに驚かされることになった。

その工夫とは次のようなものである。まず、この工房には電気を使った空調設備が見当たらない。空調は自然の外気を屋外ダクトから取り込み、地熱を利用して温度調整を行う空調システムである。説明の中で驚いた点は、従来の空調設備が出す独特の音についてであった。重油を使った温熱パネル、電気を使った空調設備はランニングコストや修繕費の面で問題があり、地熱空調システムを採用したとのことであったが、最も重要な点として学生が集中して作業するために、機械的な音をできる限りなくして静粛な雰囲気を保ちたいというものであった。陶芸のみならず、木工、金工、ガラス工芸等、もの作りの制作現場では多くの雑音とともに制作せざるを得ないために、わずかな音にこだわる説明はにわかには信じがたいものであった。

主となる作業室には、両サイドの窓際に回転ろくろが設置されていて、1年生と2年生が一人一台ずつ使用し、この工房を共有して作業している。学年に関わらず対話を深め学生同士が学びあうことを大切に考えているほかに、共同で行う行事等を円滑に行うために、あえて学年で分ける必要はないとの理由であった。

各ろくろの置かれた窓際には4ブロックに分かれた大きな窓がそれぞれに取り付けられている。窓は学生がス



図18 乾燥棚の脚部と同じデザインで作られた工房の支柱

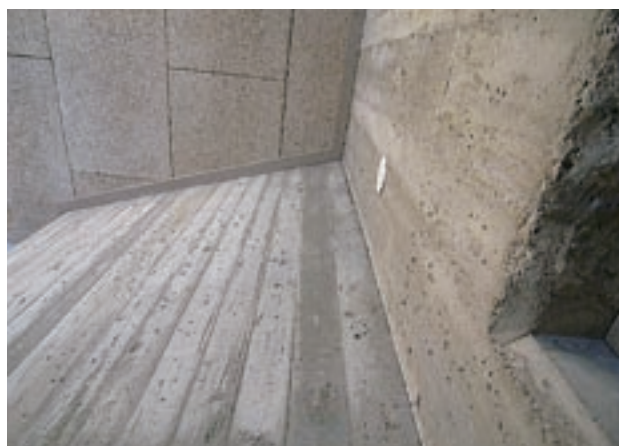


図19 90度以上の広角に建てられた工房の壁面

ツールに座ってろくろを回す時の、その膝の高さに設置されていて、自然光をたっぷり取り入れている。「なぜこのように低い窓をとりつけたのか？」という質問には、膝の位置にあるろくろを回すときに自然光が製作途中の作品の形を最も正確に見せるからだという回答であった。(図17) また、4つに分割された窓のひとつだけが開閉することができ、あとの3つは嵌め殺しで固定されていた。水分を含んだ陶器の急激な乾燥と割れを防ぐために一部の窓があければ十分だということであった。各ろくろとろくろの間には、挽き終わった作品を一時乾燥させるための棚が用意されていて、学生と学生の間を僅かに仕切っている。この棚の脚部のデザインと、工房全体を中央で支えている大きな支柱のデザイン・色彩は全く同じもので、作業環境全体に統一感を持たせたかったという。(図18)

陶芸工房の建物全体は大きくL字型に設計されているが、よく見ると直角に曲がっているわけではなく、わずかに開いた角度をもたせて建てられている。直角は視覚的に堅く見えるばかりでなく、人にストレスを与えるからだという。(図19)

陶芸専攻の学生と教員全員が集まることのできるミーティングルームと称された部屋の壁面は、光沢のない青色が淡く塗られていた。行事の打ち合わせや作品のプレゼンテーションに使うために、やや気分をクールダウンさせる狙いで彩色したとのことであった。寒色であるブルーの影響で冬季に学生は利用したと嘆いていたが、色彩にそのような意味を持たせて敢えて彩色したことに環境へのこだわりの深さを感じた。(図20) 工房の天井には大きな自然光の取り入れ窓が設置されていた。設計では、窓枠サイズよりも室内側を広く四角錐に施工して光を室内に広く拡散させるはずが、大工さんのミスで窓枠のサイズのままで施工してしまったため、全



図20 壁面が淡い青色に塗られたミーティングルーム

て取り払って最初からやり直したという。

ろくろの部屋と造形室の間には、教員室が設けてあり、前面がガラス張りで教員は学生の活動を、学生は教員の存在を見ることができるようになっている。教員室にはキッチン、レンジ、冷蔵庫、コーヒーメーカー等が設置されていて簡単な食事を作ることができる。工房の一角には、学生用のコーヒーコーナーが作られていて、作ったカップを使用して出来栄を確認することに役立っている。(図21)

陶芸専攻の工房には、加飾加工室、釉薬室、焼成室、釉薬データ室があり、それぞれの部屋は青、オレンジ、黄色、赤、グリーンの色彩で色分けされている。道具や材料をいつも決まった場所に戻すことを誘導するためである。紙粘土を使った造形室には、ステンレスでできた作業台が用意されていたために、「なぜステンレスなのか？」と質問してみた。板状の紙粘土を剥がしやすいこと、汚れたテーブルを洗いやすいためだという回答で



図22 甲板にステンレスを使用した作業テーブル



図21 学生用に設置されたコーヒーコーナー



図23 自然光に近い光源をもつ専用ライト

あった。(図22) 仮の乾燥を終え、釉薬をかけた作品は電気釜で焼き締めることになる。その焼成室には他の光源とは異なったライトが一つ取り付けられていた。そのわけを聞くと、焼きあがった陶器の色彩を、できるだけ正確に見極めるために自然光に近い2000ルクスの光源を持つライトを取り付けてあるとのことであった。(図23) また、釉薬が焼きあがった後にどのような色彩に変色するかを実験した陶片は、データルームに保管し手にとって見る事ができる。(図24) その釉薬の顔料混合比データはコンピュータの中に保存して蓄積し、後の学生が同じ色彩の釉薬を調合する際に利用できるようになっていた。われわれの一つ一つの質問に対するトレイフとエレン教師の明快な答えと説明から、それら全てが意味を持たせて設計されたものであることがわかる。しかし、どの設えも学習者に押しついたりするそぶりは微塵も見せない。彼らが必要としたとき、そこに鎮座していれば意図が達成されたことになる。

以前にも紹介したことがあるように、カペラゴーデン美術工芸学校では、発想やアイデアの源泉はいつも先人の残した伝統あるいは知識を基礎としている。その伝統は無形のものではなく、作業場、思索や語らいの場、知識の伝承方法をはっきりとした形にし、誰もがそれを自由に利用できる全体環境として提供し、制作の訓練は、こうした長い時間をかけ、試行錯誤によって出来上がった場でなされることを教育理念としている。⁹⁾ この伝統はこの新しい陶芸工房にも脈々と受け継がれている。

作業環境の利用者としての学習者を最大限に尊重し、その可能性に期待し、工房にあらん限りのカペラゴーデン的資源を注ぎ込むやり方は、1990年に初めて訪問してから18年以上たった現在も、変化なく、揺るぎなく、自信に満ち溢れていた。



図24 釉薬の色彩を確認するための陶片サンプル

7. おわりに

これまでの観察では、われわれは出来る限り利用者の目線で行ってきた。当然のこととして、設えられた環境(ここでは生活環境や道具を指す)は誰かの手によって計画され、設計され、実際に施行されたはずである。こちらの方に対する調査がもっとなされるべきではないかという批判があるかもしれない。しかし、そうは考えていない。むしろ環境の制作者とその環境の利用者とは直接的に接触すべきではないと考えている。両者の間に(人ではない)モノとしての環境を介しているからこそ、外界にある価値・意味を自由に取り出したり、感じ取ったりできるのである。両者が切り離されていて、不透透であることがかえって環境の価値を際立たせるのである。作り手側の意図や思いが、利用者には直接的に伝達されることがよいこととするのは誤謬であって、そのとき、環境(作成者側から見れば一つの作品とってよいかも知れない)はかえって利用者から疎遠な存在になってしまう。¹⁰⁾

さて、これまで紹介してきた様々な事例は、われわれの私的な観察であるとは考えていない。その理由は、どの観察経路もすべての人に開かれている。どこで立ち止まるかはそれぞれの人で違いがあろう。しかし、立ち止まったところが占有されたままになることはない。『個人の観察経路は変化し続けるが、可能な観察経路群のすべてはどこまでも持続する。したがって全動物の環境は公的で持続しているのである。…観察者は動いており環境を共有しているので、一人の観察者の環境と全ての観察者の環境は同じであり且つ異なっていることになる。この二種の環境は文字通り相互に浸透している。…見ることのできる環境とは、一人の観察者の私的な環境であり、そして全観察者の公的な環境である。』¹¹⁾

観察経路という意味ではスウェーデンは我が国とは距離的には遠いがつながっている。すべての観察者が等しく探索し共有できる機会が与えられている。どこで立ち止まるかは各自の自由であるが、その各場所で環境にある情報をピックアップするであろう。本稿はそのささやかな記録の一つに過ぎない。

スウェーデン国内を旅する中、会って話をする人、街を歩き交う人々、商店で買い物をする人、何かを工作しているひと、サービスを提供する人たちに何とも言えない余裕を感じる。生活のスピード感や街の華やかさや喧噪は日本と比べて格段に低い。しかしそこで暮らす人々には我が国では見られない生活への余裕が感じられる。

各人が目的を追求するときの姿勢にその違いが現れてくるように見える。我が国では、目的を達成するためにはそれに必要な手段を全部背負ってからでないと始められないというプレッシャーを感じるため、どうしても前

のめりになっている自分を発見する。頑張らなければという思いが知らず知らずのうちに、自分から余裕を奪ってしまっている。内に必要なものをすべて抱え込む(貯め込む)まで頑張ってから、一気にそれを外に向かって爆発させる。その推進力で降りかかってくる難関を果敢に突破する。そして成功すれば、その人への賞賛の嵐が待っている。そこにやりがいも生まれるから頑張れると自分をさらに追い込んでいく。戦いモードが常態化してハングリーでないと自分を維持できない、という思いが余裕を持たなくさせる。

さて、内に抱え込んだりせずとも「社会」が提供してくれている手立てを利用できて、目標を達成できるのだということの子供の頃から知り尽くしているスウェーデンの人々とは大きな違いがある。「知り尽くして」というのは少し言い過ぎで、ほとんどは意識も、意図もなくこうした便益を受け取っているのであろう。一人の人が持ちうるよりもはるかに多くの(システムや知識も含めた)ものが自由に活用でき、その人を知らず知らずのうちにサポートしている。そうした中で生活しているということが余裕を生み出しているのではないか。国がどこであろうと、自分の住む文明からどのような便益を得ているのかを意識することはそれほど簡単ではない。しかもそれを意識の深層にまでさかのぼって探索しようとするば道を見失ってしまうであろう。しかし、それが人々の外環境に現れているならば、観察すればよいだけである。

雪がしんと降りる夜、街灯もないのに道がとても明るい。各家の窓から漏れてくる暖かい光が、白雪に反射してとても美しい。窓際をよく見ると、窓の中央に傘つきのランプが灯され、その側にはお気に入りの調度品や花瓶に入った花が見てほしいといわんばかりに置かれている。ほとんどの家、そして道路に面した多くの窓が同じようにしてあり、その多くがカーテンは開いたまま部屋の奥の方まで見通せる。夜道を歩いて家路につく行人のための街路灯の役割をしているのだろうか。これがスウェーデン流の防犯なのだろうか。日本では考えられない光景を不思議に眺めながら、われわれは何か暖かいものを感じつつ帰宅の途についた。^{*4}

謝辞

今回の調査では、現地スウェーデンの福祉施設については介護士のリエナ・パーソン、病院では医師のシャスティ・ヘレクビスト、そして、カペラゴデン美術工芸学校では木工インテリア科専任教師のキャレ、ベンクト、陶芸科の専任教師トレイフ、エレンほか、多くの皆様に施設の説明をしていただき、また貴重な資料を提供していただきました。多大なご協力に心より感謝いたします。

本調査研究は、平成20年度科学研究費補助金(課題番号:19500730)の助成を受けて実施しました。

【注釈】

- * 1 河野哲也による言葉を借りれば、『知覚世界は、実在の世界(外にある現実の世界)そのものではなく、心がつくりだした実在の似像、あるいは表象である。実在の世界からやってくるのは、知覚世界の構成要素(感覚、センス・データ)だけであり、複雑な知覚世界は、心(ないし脳)がこれらの要素を加工することで作りだされる。』¹²⁾
- * 2 リードは次のように付け加えている。『ギブソンの研究以前には、心理学者も生理学者も「情報」を神経系のなかに見つけようとしていた—そして、ほとんどのひとはいまでもまだそうしているのだ!けれども、ギブソンは、情報を神経系の「なかに」押し込めてしまうまえに考えるべき当然のことを考えた—環境には、いったいどんな情報源があるのだろうか? 動物に選択圧をかけ、動物がそれに適応できるような情報源が環境のなかにあるのだろうか? この問いは、進化的な観点からみれば、心理学にとっての根本的な問題である。ところが、残念なことに、比較心理学ではこれまでこうした問いに答えることはおろか、きちんと体系的に問うことさえしてこなかったのである。』⁴⁾
- * 3 戸田山はさらに続けて、『知識を信念から切り離すということは、ある意味で知識を心から切り離すことだと言ってよい』⁷⁾、と述べている。
- * 4 後日「なぜ窓辺を飾るのか」、とスウェーデンの友人に尋ねてみた。「外から人の目に触れるものはすべて共有される。窓辺は自分だけのものではないから。」と言う答えが返ってきた。

【引用・参考文献】

- 1) 佐々木正人・三嶋博之(編訳)『生態心理学の構想』東京大学出版会,P.4,2005,
- 2) ギブソン,J.J,古崎敬他共訳『生態学的視覚論』サイエンス社,1985(Gibson,J.J.,The Ecological Approach to Visual Perception,Erlbaum,Hillsdale,1979)
- 3) リード,E.S.,柴田崇・高橋綾訳『伝記ジェームズ・ギブソン』勁草書房,2006,P.286(Reed,E.S.,James J.Gibson and the Psychology of Perception,Yale University Press,1988)
- 4) リード,E.S.,細田直哉訳『アフォーダンスの心理学』新曜社,p.99,2000(Reed,E.S.,Encountering the World Toward an Ecological Psychology,1966)

- 5) Dretske, F., Knowledge and the Flow of Information, Basil Blackwell, 1981
- 6) 戸田山和久「知識と情報—動物は信じない」(森際康友編『知識という環境』名古屋大学出版会, p.89, 1996)
- 7) 戸田山和久『知識の哲学』産業図書, P.249, 2002
- 8) 前掲文献³⁾ P.367-8
- 9) 小松研治・小郷直言, 『カペラゴードン美術工芸学校を再考して』, 高岡短期大学紀要, 第10巻, 1997
- 10) 小松研治・小郷直言, 『使用者の技術』, 高岡短期大学紀要, 第11巻, 1998
- 11) 前掲文献³⁾ p.384
- 12) 渡辺恒夫・村田純一・高橋滯子編『心理学の哲学』北大路書房, p.203, 2002